

こんな本を読んできました

銀座の小さな文房具店、四宝堂を訪れる人の中には、大事な人に伝えるべき言葉に迷っている人達が訪れます。育ててくれた祖母に初任給で購入した贈り物に添える手紙を書く青年。昔、不義理をした大将にお詫びの気持ちを伝えられずにいる鮎職人。店主の宝田硯は、お店に訪れる人の抱える悩みに触れ、ぴったりの便せんや筆記用具をおすすめしながら寄り添い、そっと背中を押してくれます。

万年筆やシステム手帳・大学ノート・絵葉書・メモパッド、その文房具に込められた思いがこもっている短編集です。私は「万年筆」の話がお気に入り。二分の一成人式に夏子さんが込めた思いと心意気にぐっとくる一冊です。

タイトル 銀座「四宝堂」文房具店
著者 上田 健次
出版 小学館



呉市と関わりのある作家や事柄の 所蔵資料を紹介します。



郷土資料

タイトル 明子さんのピアノとパルチコフさんのヴァイオリン
著者 西村 文(中国新聞社)・廣谷 明人・二口 とみゑ
出版 ガリバープロダクツ

19歳という若さで原爆の犠牲になってしまった明子さんが、生前使っていたピアノが現在、平和記念公園の被爆建物「レストハウス」に展示されています。

原爆によって住む家を失ってしまった、音楽教師をしていたロシア人のパルチコフさんが、母国から大事に持ってきていたヴァイオリンは、広島女学院歴史資料館に所蔵されています。

原爆によって傷ついた「明子さんのピアノ」と原爆の被害を奇跡的に免れた「パルチコフさんのヴァイオリン」 時間と空間を超えて、平和への思いがふたつの楽器をとおして交わり、各地でコンサートが開かれました。

図書館でも、この本を郷土資料として保存し、平和を願う気持ちを繋ぎます。